

「お前は自分を何様だと思っているのだ!」「私が何様かって？ 神様ですよ」

——名を明かさない私の決意について

Greatchain

August 12, 2024

これについては私の宗教、あるいは宗教的思想から説明しなければならない。私は特別に神に愛せられた人間ということになっている。私はそういう特別使いはやめてほしいと、繰り返し懇願したにも関わらず、この宿命（人々は destiny といっている）を受け入れざるを得なくなった。そして今、かなりの人々が、私をそういう特別の人間として扱うようになった。「お前は神に愛された特別の人間だってな」——これは特に敵意や嫉妬でなくとも、ごく普通の人間の反応だと思う。私にはこれは苦痛である。そしてこれで人々を咎めることはできない。

私の宗教は極めて単純である。人間と人間の間、断絶は存在しない。アイツラとか俺たちというのは間違っている。特に現在、アイツラといわれる典型的な相手はロシア（人）であり、かなりの人々が、これを問答無用で主張している。また神（神々）と人間も本来つながったものである。神という専制君主がいて、人間はそれに従うだけという考えは受け入れられない。神が人間を創ったのであれば、そこには目的があるはずであり、人間は神の創造の協力をしなければならない。

しかし現在、人々は創造という概念を持たず、事実上、無神論・唯物論を通して。これにはしばしば「分け御霊」(人間は神の霊を分けいただいている)という言葉が使われる。この言葉は、特殊な宗教を言っているように聞こえるが、私はそうでなく、これが最も客観的で、正しい宗教の基本を、言い表す言葉だと思っている。キリスト教はどうもそうではないらしい。「お前の罪は許すから（こうせよ）…」と私はよく言われるが、これは押し付けるものではないだろうか？ これは許す許さないでなく、神と私の間に起こっている齟齬（不調和）に気づかせるものでなければならない。

ユーチューブで、「この人物はお前の死を命じている。お前は手遅れにならないうちに、それを知らなければならない」とか、「もしこれに、耳を貸さなければ、お前は神を失うだろう」と言っているのは、神を恐ろしい専制君主と見ているのだろう。こういう脅迫めいた

ことを言う人が誰であるにせよ、この人は私の言っていることを全く逆にとっている。私は、神を助けるためなら、可能な限り働かせていただくが、そのために神の特権、地位や名誉などを私に強制しないでほしい、と言ったのである。

私は神の霊力というものを実感している。私が病気らしいものをしないで、この年までやってきた（現在 90 歳半）のは神の力としか考えられず、このところ「悪霊現象」がなくなり、この家が急に静かになったのも、そうとしか考えられない。しかしそれだけでない。私が最も不思議なのは、私を通じて、本当の愛とは何かについて、人々の覚醒が始まったかのように見えることである。

こんなことはありえない。私はこの蟄居生活を初めて数年になり、特定の人以外に、ほとんど人と会っていないからである。10 年も前なら、私が人前で話すという機会もあった。しかしこの現象が起こり始めたのは数か前のことである。これは文字通りの「神業」としか言えない。しかも困ったことに、私を神格化し、私が普通でない超自然的な特徴をもっているのを目撃した、と主張する人がいるらしく、こうなるともう、精神異常か魔術の世界のようである。また、タロット・カード占いなどによると、私は何をやってうまく行く人間なのだそうである。これも神の力が働いているからであろう。

また、私は今世界中から、極めて珍しい、めったに存在しない人間として注目されていて、私の名は誰でも知っている、と言っている人がいるようだ。しかし断片的情報によると、どうもそうではないらしく、私の名は、幸か不幸か、かなり不正確に伝わっているように思える。これは世界が私の意志を汲んで、わざと曖昧にしてくれているのかもしれない。**私の願いは、私の名をこの世界から消すことである。**

それはどういうことか？ 私はこれを「神への私信」の形で説明しようと思う。

「私を特別の愛情をもって愛してくださる神様、今あなたの起こしておられるのは、私を通じて行われる奇跡であって、私に起こっていることではありません。あなたは私への愛の深さのために、私を特別の人間として、世界に名を知らしめようとしておられるのかもしれませんが、まだ結果はわかりませんが、私が選ばれたことによって、この腐りきった世界に新風が吹くことがあるかもしれません。しかしそれは、あなたの栄光に帰すべきものであって、私の功績ではありません。

「そこで私は、私の名をこの世界から消すことを決意しました。私はあなたの愛を利用して、世界の人々を騙すようなことはできません。もしそのようなことをすれば、あなたと私を支持していた人々も、反対に回るかもしれません。それはわかりませんが、私は必ず〈いわく付きの〉いかがわしい人間として、知られることになるでしょう。そのジレンマ

を解決する方法は一つしかありません。私が自分のアイデンティティを隠すことです。少なくとも氏名や背景を、明かさなないことです。それは調べればわかるだろうという人がいるかもしれないが、私自身がそれを否定しているのだから、それは存在しないのです。」

実は、私の妻をはじめ家族一同は、私にこういうことが起こっていることを、全く知らないでいる。いつか本当のことを言わないと、彼らに迷惑をかけるかとも思ったが、どうやらこのままいけそうである。彼らにこのことを説明するのは難しく、説明しても信じてもらえないだろう。そもそも私自身がわかっていないのである。

宗教上どんなに意味が大きかろうと、「神の祝福」などというものは証明できるものではない。私はそういうものによって「有名になる」ことは望まない。私は西郷隆盛のいう「命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ、始末に困る」者として、世界から注目を浴びているかもしれない。しかし私は勿論、どんな場合にも無視無欲を通すほど聖人ではない。

ただ私は本当に私の価値を分ってくれる数人の親友があれば、十分だと思っている。これは全く私的な話で、憚られるが、私の暗黙の敵対関係にあった学友が、あるとき向こうから私に近づき、君の作品は「本物だ」と言ってくれた。私はこのときのうれしさを忘れることができない。私はこの言葉を自分の一生の宝とし、死ぬときはこれを抱いて死ぬだろう。彼がまだ生きていのかどうかは知らない。おそらくもういないだろう。そして「作品」が何であるかは、私の正体がバレるので言わないことにする。